答辞

私たちは、本日をもってこの修猷館高校を卒業いたします。最初に、今日この卒業式に臨席していただき、私たちの卒業を見届けてくださる方々、さらに、いつも私たちを見守ってくださっているすべての方々に感謝申し上げます。

「卒業おめでとうございます」今日はその言葉が、多くの人からさまざまな想いで私たちに降り注いでくることでしょう。

言葉には力があります。言葉というものは、良くも悪くも人の心に刺さります。押しつぶされるほど言葉が多いこの時代、私たちは修猷で多くの言葉と出会ってきました。

「人生を変えてやる」その言葉から始まった大運動会。その涙は、その歓声は、その熱すぎた思いは、昨日のことのように思い出されます。

「状況の全肯定」どんな状況であれ、その状況を全部肯定すること。この言葉は私たちの代名詞でもありました。大変な時、つらい時、誰かに支えてほしい、そんなときにこの言葉を思い出し、私たちの代でしか感じられない特別な想いを感じていました。

言葉のほかにも、様々な音にも触れてきました。宗像で聞いた花火の音、寒ささえ吹き飛ばしてくれた和太鼓の音・・・。それをも凌ぐ思い出の音として、言葉として、「宙船」が残っています。

「その船を漕いで行け、お前の手で漕いで行け、お前が消えて喜ぶ者に、お前のオールを任せるな」。この「お前が消えて喜ぶものにお前のオールをまかせるな」という歌詞は、「自分が居なくなった時に、本気で悲しんでくれる人にならば、人生の舵取りを任せてもいい」と解釈できるのかもしれません。修猷は「この人についていきたい」「この人なら自分の運命を任せてもいい」と思うことができる最高の場所。そして、そう思わせてくれる最高の仲間がいる場所でもありました。

この中には将来、国を引っ張るようなリーダーになっている人、人々を元気づけられるような仕事についている人、次の世代のために努力している人もいるでしょう。大人になり、何かにつまづいている時、この三年間で出会った言葉の力で、前を向ける。そんな力を与えてくれる青春でした。

そんな三年間を支えてくださった先生方へ。苦しい情報社会となった時代を生きている私たちの心情に深く寄り添っていただき、ありがとうございました。修猷の先生方には、さまざまな言葉を熱い思いで語っていただいたことが、今も私たちの心に響いています。

そしてこの答辞が届いている全ての方々へ、この大切な三年間の思い出を、「新型コロナウイルスの影響で」という言葉で終わらせて欲しくはありません。私たちもそんな言葉で終

わりたくありません。高校生活を振り返るとき、そのたった一言で、ほかの大事な全ての思い出が無かったことのように見えてしまいます。だからこそ、私はこの答辞で、三年間で出会った、忘れたくない言葉の中に、「新型コロナウイルス」は入れませんでした。

「《コロナ世代》なんて言わせない。」この言葉が私たちの青春の終わりを飾るべき言葉であり、「この話を笑って話せるほど、胸を張って人生を送る」これこそがこれからの人生の始まりを飾る言葉です。

答辞というのは「感謝の意をもって送辞や祝辞に答えること」ではありますが、私一人では、卒業生全員の感謝の気持ちは支えきれません。各々がそれぞれの想いで、それぞれの方法で、それぞれの言葉の力をもって、この三年間を支えてくださった人に伝えることを誓いまして、答辞といたします。

答辞とは別に、三年間最後の言葉としまして、この言葉を２０４５年の私たちに贈らせてください。

「修猷２０２０、耐えて頑張れ」いや、「楽しんで頑張ろう」

令和五年　三月四日　卒業生代表　本田　萌